―植物雑考・秋の七草―

全国農村教育協会　廣田伸七

「萩の花尾花葛花瞿麦の花女郎花また藤袴朝貌の花」これは万葉集にある山上憶良の「秋野七草花」の歌である。これを現代風にすると「萩（ハギ）の花，尾花（おばな・ススキ），クズの花，瞿麦（ナデシコ）の花、女郎花（オミナエシ），また藤袴（フジバカマ），朝貌（アサガオ）の花」となる（注・このアサガオというのはキキョウのことで，これはキキョウの項で解説した）つまり秋の七草とは秋の野に咲く代表的な七つの草の意で昔から親しまれて，万葉集をはじめとして，奈良，平安時代の歌の中にもよく秋の七草が詠みこまれている。

この秋の七草，「ハギ，ススキ，クズ，ナデシコ，オミナエシ，フジバカマ，キキョウ」は昔は山野で普通に見られた草花であったが，21世紀の現代では，野に咲く野生の秋の七草を全部見ることはかなり難しい時代になった。

埼玉県の秩父地方には七草寺と稱して，秋の七草がいくつかの寺にそれぞれが植えられていて，それらの寺を廻ると秋の七草が見られるようになっていたり，東京の向島百花園では秋の七草全部が植えられていて１ケ所で全部がみられるようになっている。また，各地の植物園や寺などでも栽培されていてみられる所もある。

その昔はどこの山野にも見られた，野に咲く秋の七草であったが開発が進んだ現代では野生のものを見ることはかなり難しい時代となり，なかには希少植物になっているものもある。また，昔は似たようなものを一括して呼んでいたが，学問の進歩によって分類されて，草の名前そのものが正式和名にはないものもある。秋の七草の今昔を雑考して見た。

「萩」ハギ〔マメ科〕

現代の植物図鑑の索引を引いて見てもただ単にハギという名前がない図鑑が多くある。ハギの名のつくものにはヤマハギ，キハギ，マルバハギ，ツクシハギ，ケハギ，ミヤギノハギなどがあり，中でも有名なのが花が大きく美しいミヤギノハギで植物園や庭園に多く植えられている。この「ミヤギノハギ」は野生のものではなく，野生のケハギ（花が淡紅紫色で茎に毛が多い）から園芸化されたものである。ハギの仲間は日本の秋の野山を彩る代表的な植物で，古くから親しまれ，万葉集のなかにハギを詠んだものの歌は140余種があって１位で，２位の梅を大きく引き離している。この昔からハギと呼ばれているものは現代の分類が進んだ植物名ではヤマハギのことである。ヤマハギは現代でも山野に多く自生していて普通に見ることができる

▲ヤマハギ

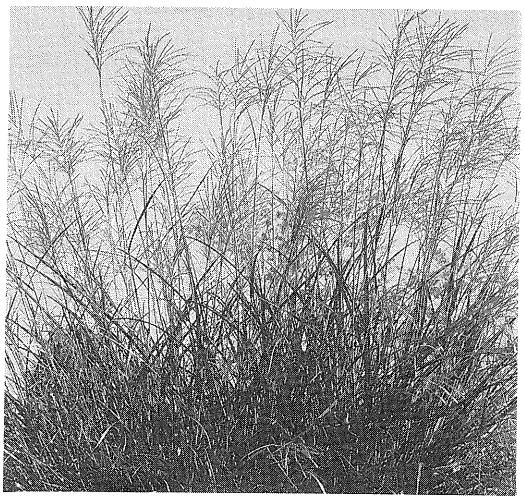
が，花はミヤギノハギよりやや見劣りする。ヤマハギは昔から茎や枝で垣根を結んだり，茎で行李や籠などを作ったり，また小屋の屋根ふきの材料にも使われ多方面で利用されていた。

ハギの語源についてはいろいろあるが，一つには生え芽（ハエキ）という意味で，古い株から芽をだすというのでこの名がついたというもので，昔はハギを芽子と書いていたが，秋に花が咲くので草冠に秋と書いて萩（ハギ）と読ませたという説がある。萩は昔から親しまれていた証拠に昔の屏風や掛軸に描かれたり，着物の柄にもよく使われていたことからも分かる。

「薄」ススキ，尾花〔イネ科〕

万葉の時代では尾花（オバナ）といわれていたが，後に薄（ススキ）または尾花といわれていたようである。ススキは現代でもどこにでも野生していて，山地，高原，土手などに大きな群落をつくっている。ススキも現代では葉が細いものをイトススキ，小穂の基部の毛が紫色を帯びるものをムラサキススキ，暖地の海辺に生育するハチジョウススキなどの品種がある。

ススキとよく間違えられるのがオギである。



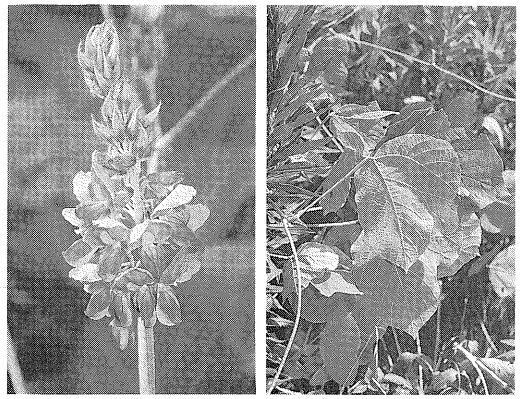
▲ススキ

茎や葉，花穂の姿，形が非常によく似ていて，ちょっと見ただけでは区別が難しい。簡単な見分け方は根元を見ることである。ススキは大きな株になって茎は株からまとまって出ているのに対し，オギの茎は１本１本独立してはえていて，密生していても株にはなっていない。地中に縦横に走る根茎があって節々から茎を直立させるので群生していても茎は１本１本別々になっている。花穂はススキよりも大きく見映えはいいが，仲秋の名月にダンゴと供えるにはススキの方が風情がある。オギは川岸や河川敷に大きな群落をつくっている。

ススキは別名でカヤと呼ばれる。これは昔は屋根をふく材料として使われ〔かやぶき屋根〕と言われたのがこれである。秋にススキを刈り取り，これから葉の部分を除いて茎だけで屋根をふく刈屋根である。これも昔は貧乏人の家はススキの材料は高いので，材料費が安い麦がらや藁を使ってふいた。ススキと麦がらや藁とでは耐久性が著しく違い，ススキは長持ちするが麦がらや藁は腐りが早く長持ちしなかった。昔は屋根を見ると貧富の差がわかったものである。

「葛」クズ〔マメ科〕

クズも現代でもどこにでも見られる野草の一つである。山野のどこにでもはえ長い蔓を伸ばして樹木に巻きついたり，電柱にはいあがって電線に巻きついたりする厄介な草として害草扱いにされている。また，都会でも鉄道沿線や道路の法面に広がっているのを見かける。この旺盛な成長力に目をつけたアメリカ人が砂防用などの緑化用と家畜の餌料用に日本から持って行き利用したが，はじめは喜ばれたがそれが各地に広がり，住宅地などにも広がって今では手をやいて厄介もの扱いされている。日本でも昔は



▲左・クズの花，右・葉を閉じたクズ

クズは家畜の餌料として盛んに利用された時代があった。

クズはわが国ではこの根から採れるクズ粉をクズ湯や和菓子の材料としたり，漢方薬の原料として珍重されてきた。クズの名はクズ(国柄)という地名からついたといわれている。昔大和国吉野郡吉野川の川上に住んでいた土民を国柄人(クズ人）とよんだ記録がある。この国柄人たちはクズカズラ（クズ）の根から葛粉を採りこれを都などに売りに来たことから，その原料となったクズカズラがいつしかクズと呼ばれるようになったという説がある。この地方に産する葛粉は吉野葛の名で現在でも高価で市販されて京都の高級菓子に使われている。現代の普通一般の葛粉はジャガイモの澱粉から作られている。

クズの花は野生植物としては花穂が大きく，紅紫色の大きな花をつけるので季節の花としても観賞されている。

ところでクズの葉は真夏の熱い日は昼寝をすることをご存知ですか。クズの茎や小葉のつけねには「葉枕」という膨れた部分があり，この葉枕の細胞内が膨張したり圧縮したりする作用によって，小葉を閉じたり開いたりする睡眠運動をする。曇天の日中温度が高くないときは葉を開いているが，光が強く暑い日になると３枚の小葉を閉じて水分の蒸発を防ぎ白っぽい葉裏が見えるようになる。つまり昼寝をする訳である。やがて夕方になって涼しくなるとまた葉を広げて３枚の小葉は下向きに垂れさがる。マメ科の植物にはこのように睡眠運動をするものがあり，ネムノキなどもこれであり，カタバミ科の植物も睡眠運動をする。

「瞿麦・撫子」ナデシコ〔ナデシコ科〕

ナデシコは植物図鑑の索引を見ても単なるナデシコの名は見当たらないのが多くの図鑑である。

現代の図鑑ではカワラナデシコ，ハマナデシコ，シナノナデシコ，エゾカワラナデシコなどがあり，カワラナデシコが秋の七草として記載してある。つまり，昔はナデシコと呼ばれていたものが現代ではカワラナデシコとして分類されているのが普通である。ただ，改訂増補牧野新日本植物図鑑（北隆館）だけはナデシコ（別名カワラナデシコ）と記載している。ナデシコの名は花が可憐で愛らしいので撫子（なでこ）から来たといわれている。

▲ナデシコ

▲オミナエシ

▲オトコエシ

「女郎花」オミナエシ〔オミナエシ科〕

「秋の田の穂向き見がてりわが夫子（せこ）がふさ手折りけるをみなへしかも」万葉集にある大伴家持の歌である。大伴家持が越中の国守として在任していたある年の８月に家持が一席の宴を設けたときに，大伴池主が領地の秋の田の穂向き，つまり稲の稔りの様子を見がてらにたくさんの「オミナエシ」の花を手折ってそれを宴席に持ち込んできた様子を大伴家持が詠んだ歌である。このように万葉集をはじめ，「源氏物語」「枕草子」「紫式部日記」などにも「オミナエシ」の名が多く現れていて，奈良，平安時代からオミナエシは多くの人に愛されていたことがうかがえる。そして，この花に「女郎花」の字をあてオミナエシと読んでいた。

このオミナエシ「女郎花」に対し，同じ属でオトコエシ「男郎花」という野草がある。

オミナエシは花が黄色で全体が優しい感じがするので女にたとえて「女郎花」オミナエシと呼び，これに対し，オミナエシよりも茎も太く全体が大型で白い花をつけるものを男に見たてて「男郎花」オトコエシと呼んでいる。オトコエシも山野に自生する。

このオミナエシは，昔は里山から山地までよく見かけられ，農山村ではお盆の墓参りに仏前に供える仏花として山野から採ってきて供えるのが普通であったが，最近は野生のオミナエシを見ることは難しくなってきた。

この頃庭や公園に植えられたり，切花用に栽培されている「オミナエシ」は，中国から移入された中国産のオミナエシが多いようである。オミナエシは野生としては希少植物になりつつある。

「藤袴」フジバカマ〔キク科〕

秋の七草の一つとして親しまれてきた「フジバカマ」であるが，現代ではレッドブックに記載され希少植物，地方によっては絶滅危惧種に指定されている。

日本では関東地方以西の川岸の湿った草地に生育するキク科の多年草で，高さ1m内外，8～9月に茎の先に多くの枝を出し，先に密に小花をつけた散房花序をだし，花序の先端は平らにな

▲フジバカマ

る。花は紫色。現代では植物園などで栽培されている。昔は川岸の原野に普通に見られたが開発によって野生を見られるのはごく希である。

古くに朝鮮，中国から渡ってきた。古い帰化植物といわれ，全体に香気があり，中国では香草，または香水蘭といって身につけたり，浴湯に入れたり，髪を洗ったりするという。

「桔梗」キキョウ〔キキョウ科〕

キキョウもまた野にある野生のものは次第に少なくなっている。キキョウは昔から薬用や観賞用に栽培されて多くの品種がある。品種改良された栽培品は1株に多くの花をつけ，また花も大きいが，山野に昔からある野生種は茎が細く，花の数も少なく清楚である。昔は山野でよく野生種が生育していて，オミナエシと同じく農山村ではお盆の墓前に供える花として山野から採集してきて墓に供えたものである。従って，キキョウにはボンバナ（盆花）という方言名もあった。しかし，これも最近は山の手入れがされなくなるにつれて次第に姿を消していった。

ところでキキョウの花は上から咲くだろうか。逆に下から咲くのだろうか，どちらかご存知かな？　多くの植物の花は花序の下の方から咲いていくが，キキョウはこれとは逆である。

キキョウは「有限花序」という花軸の先端の花から咲き，次第に下の方へと咲いていく性質をもっている。はじめの茎つまり主軸の頂端に蕾がついて生育が止まり，次にその横から出た枝の先に蕾がついて生育が止まるということを繰り返して，花は主軸の先端のものから咲き，次にその下の枝の花が咲くといったように上部のものから下の方へと順に咲くという咲きかたをする。これを「有限花序」という。

さて，はじめにあげた万葉集にある山上憶良の「萩の花尾花葛花瞿麦の花女郎花また藤袴朝貌の花」秋野七草の歌の最後の朝貌の花が「キキョウ」であると書いたが，これには次のような説がある。この朝貌（アサガオ）には古くからいろいろな説があるが，現代ではこれはキキョウであるというのが定説になっている。これを裏づける資料として万葉集に「朝貌は朝露負いて咲くといへど夕影にこそ咲きまさりけれ」という歌があるが，この朝貌が昼間になるとしぼんでしまう本当のアサガオであるならば夕方に美しい訳がなく，夕影にこそ咲きまさりけれというのはキキョウならば，朝露を受けた風情もよく，また夕影にはいっそう花の色が冴えるキキョウならば，この歌が納得がいく。従って朝貌というのはキキョウであるという説である。

▲キキョウ

この項を書くにあたって参考にした書籍

植物名の由来・中村浩（東京書籍）
植物和名の語源・深津正（八坂書房）
ほんとうの植物観察1・2・室井綽・清水美重子（地人書館）
日本の野生植物・2・3・佐竹義輔他（平凡社）
改訂増補牧野新日本植物図鑑（北隆館）